

【史料紹介】 埼玉温泉ことはじめ

田口 志織

はじめに

埼玉地域において日本近世の温泉、湯治の研究はできるだろうか。有名な温泉地が思い浮かばないような地域で、温泉の研究はどのように展開できるのか。本稿はこの疑問について考察する第一歩として位置付ける。

温泉の研究は、温泉に含まれる成分分析や、その成分が人間の身体にどのような影響を与えるのかといった効能についての研究、あるいは源泉の利権をめぐる研究など、様々な分野から展開している。

こと日本近世史においては、二〇〇〇年代以降に研究が進展した。温泉地、湯治場という空間について⁽¹⁾や、温泉の経営実態⁽²⁾が明らかにされた。温泉を利用する人に視点をうつすと、大名の湯治とその意義についての研究や⁽³⁾、武士とその家族の湯治研究⁽⁴⁾がされている。加えて、温泉地についての情報収集や、湯治場での人々の情報交流の様相が明らかにされる⁽⁵⁾など、多角的な研究が蓄積されている。

ここまで温泉経営や温泉の利用者についてなどの先行研究を見てき

た。武士から庶民まで幅広い層の人びとが温泉を目指して旅をしたことが分かる。その理由のひとつには、とりわけ庶民にとって旅をしやすくなったことがあるだろう。近世期は宿駅の整備が進み、それ以前の時代に比べると交通事情が好転した。旅をする際には往来手形や関所手形の所持が必要であり、それにより居住地域を越えた移動や身分の証明が可能となり、道中の安全が確保されるようになった。このような背景から支配者層だけでなく庶民にも旅が浸透した⁽⁶⁾。また各地の「道中記」、「名所図会」や、八隅蘆庵が記した「旅行用心集」（一八一〇年）といった、各地の名所紹介や旅のマニュアル本が多数出版されたことが、旅の普及に一役買った⁽⁷⁾。なかでも、「旅行用心集」は湯治について触れており、ここから湯治をすることが旅の目的なかに、温泉に入ることが組み込まれていたといえよう。「旅行用心集」では温泉の入りをはじめ、功能、禁忌症状、湯治中に飲食してはいけないことなどの注意事項を記す。湯治について触れる出版物にはこのほか、貝原益軒（一六三〇—一七一四年）の『養生訓』（正徳三年（一七一三）刊）があり、温泉

一般について著された。また、医師の柘植龍洲(一七七〇—一八二〇年)の『温泉論』(文化六年(一八〇九)刊)では温泉を学問的に考察し、温泉は身体の養生であると見なされはじめた。加えて、「諸国温泉功能鑑」のような見立番付が作成され、温泉がより身近なものとなった。以上から近世の湯治は、療養と娯楽の両側面をもつて人びとに受容されていたといえよう。近世一般の温泉事情がみえたところで、現在の埼玉県域の人々は、どのように温泉と関わっていたかをみていく。

これまで、日本近世史における温泉の研究が対象としてきた地域は、伊香保・草津(群馬県)や、浅間(長野県)、箱根(神奈川県)、熱海(静岡県)といった、今なお有名な温泉地であることが多い。しかし、日本国内には各地に温泉の源泉や温泉宿があり、埼玉のような一見、有名な温泉地が無い地域では史料が限られているため前述のような研究は難しさがある。管見であるが、埼玉を対象地域とした近世温泉の研究は見られなかった。そこで本稿では、埼玉県立文書館の収蔵資料を中心に、当該地域の近世から明治初期までの温泉地と、そこに暮らした人々の温泉利用を紹介し、埼玉の温泉研究の事始めとしたい。

なお本文中で史料を引用しているが、漢字は原則として常用漢字を用い、常用漢字にないものは原則として正字を用いた。史料には適宜読点を付した。変体仮名、合字は史料のままにしている。欠字は一文字あけ、判読ができなかった文字は「○」とした。

一、埼玉の温泉地

はじめに温泉とはなにかを整理する。昭和三年(一九四八)制定の

温泉法によれば、「地中からゆう出する温水、鉱水及び水蒸気其の他のガス(炭化水素を主成分とする天然ガスを除く。)で、別表に掲げる温度又は物質を有するもの」が温泉であるとされている。別表の内容をみると、温度は温泉源から採取されるとき温度が、摂氏二十五度以上で、物質の含有量が一キログラム中の溶存物質(ガス性のものを除く)が総量一〇〇ミリグラム以上などというような、計一九種のうち一種を含むものとしている。

埼玉県の温泉については、令和四年(二〇二二)度では、温泉地数が二九か所、源泉総数は一一六か所で、温泉地での年間の延べ宿泊数は六八九、四四一人である。この数値を他の都道府県と比べてみると、温泉地数は三七番目、源泉総数は四二番目、年間宿泊者数は四〇番目である⁽⁸⁾。この数値をみれば、埼玉と温泉を結び付けて想像ができないのも納得できる。

近世の埼玉地域において温泉地として知られるのは秩父地域の秩父七湯である。秩父七湯は『日本歴史地名体系』によれば、江戸時代から続く主な鉱泉の総称で、新木鉱泉(現秩父市山田)、大指鉱泉(現横瀬町)、鳩の湯(現秩父市荒川日野)、鹿の湯(現同市荒若白久)、柴原鉱泉(現同市荒川小野原)、千鹿谷鉱泉(現秩父市上吉田)、梁場鉱泉(現同市吉田太田部)の七湯をさす⁽⁹⁾。うち大指温泉は大正一二年(一九二三)の関東大震災で倒壊、梁場鉱泉は昭和四一年(一九六六)の下久保ダム建設により消滅、鹿の湯は一九〇〇年代後半に閉鎖となっている⁽¹⁰⁾。また管見の限りだが鳩の湯は平成二三年(二〇一一)から平成二七年(二〇一五)の間に閉鎖しているようだ。続いてこれら鉱泉については『武蔵国郡村誌』⁽¹¹⁾をもとに見ていく。なお、鳩の湯については記

述が見られなかった。

新木鉱泉を引く湯杭の湯は、泉質は硫黄、銅鉄、石灰の成分を含有し、疥癬やリウマチ、梅毒、皮膚病などに効果がある。浴場は五か所あり、旅館は一戸、一年におよそ千人の入浴客がいる。

大指鉱泉を引く大指泉は、泉質硫は黄、礫稍、緑礬の成分を含有し、疥癬、寒疝、リウマチ、痔、淋病などに効能がある。浴場は一か所で、旅館は一戸、一年におよそ三五〇人の入浴客がいる。

鹿の湯を引く温泉は篠沢湯と殿山湯がある。前者は泉質が不詳で、浴場が一か所、旅館が一戸ある。後者も泉質が不詳で、浴場小屋が一か所あるのみで旅館は無い。両者一年の入浴客数は不明だが多くはないとのことである。

柴原鉱泉は、温泉の不溶性成分が析出し沈殿したものである湯の花が浮く温泉で、「鶏卵の如き湯」と記されていることから、硫黄性の泉質をもっているだろう。泉質はリウマチ、痔、打身などに効能がある。浴室が三戸あり、一年の入浴客は三千人である。また『新編武蔵風土記』には、この温泉が賑わいはじめたのは近頃のことと、年々浴客が増えており、特に三月、四月、六月、七月は入浴客が大勢訪れることが記されている⁽¹²⁾。

千鹿谷鉱泉を引く千鹿湯は、泉質は硫黄で、皮膚の発疹やできものに効能がある。旅館は二戸あり、一年の入浴客は五百人である。

梁場鉱泉を引く梁場の湯は、疝痛、中風、腫物などの諸症状に効能があり、旅館は二戸、入浴客は一年に五十人ほどである。梁場の湯については埼玉県立文書館の寄託の新井家文書からもわかる。新井家は太田部村で代々名主を、明治時代に入ってから同村の戸長を務めた家である。

新井家文書からはじめに、梁場の湯の概要を掴むことができる。「温泉取調書上帳」（史料一）をみていく。

【史料一】「温泉取調書上帳」、明治六年八月、埼玉県立文書館寄託、新

井家文書 No. 735

（前略）

一、温泉湧出起元相分不申候、

一、湯底之義者、石砂交從前冷泉汲ニテ、神流川満水之節者石砂ニテ捍、

埋立、家流失等之有候、

一、原泉壺ヶ所、右汲井戸壺間半四方、

一、功能、諸病平癒して土人中伝ひに御座候、

一、入湯諸病者概数、明治三年年々昨壬申年迄月二四、五人位々、十四

五人位、凡壺ヶ年分平均、百廿人位、

内、虚症病者、六歩、

疝氣、疥癬、腫物類之者、三歩、

打ち身、金瘡之者、壺歩、

一、温泉廃止箇所、未開カサル場所右之外無御座候、

一、從前冥加永式百文宛御上納之处、寛政年中神流川満水ニ付温泉湧口

石砂ニテ捍埋立、家式軒流失仕、文化元年子年右冥加永御免除相成、

弘化四年末年再興、明治三年年御冥加五百文御願濟御上納仕来申候、

右之通御座候、以上、

右村

明治六_西年第八月

戸長

熊谷県令殿

(後略)

史料一は、明治六年（一八七三）に太田部村戸長の新井重一郎が、熊谷県令河瀬秀治に提出した、梁場の湯の概要を書き記したものの控えである。

梁場の湯には、明治六年時点で源泉が二か所ある。温泉の効能は地元の人々の言い伝えで諸病平癒であるとされている。入浴客数について、明治三年（一八七〇）から明治五年（一八七二）まで、月に四、五人から十四、五人くらいで、年平均で二二〇人の利用があった。病人の内訳を見ると、虚症病者（心身の衰弱）が六割、疝気、疥癬が三割、打身、切り傷が一割である。冥加は一年に二〇〇文を納めていたが、寛政年中の神流川の出水による土砂災害で、湯小屋二軒が被害に遭い、それに伴い文化元年（一八〇四）に免除となった。弘化四年（一八四七）に温泉が再興すると、明治三年には冥加五〇〇文を納めることを申し出ている。次にあげる史料二からは梁場の湯の経営実態がうかがえる。

【史料二】「梁場薬水温泉冥加永願書 外質屋鍛冶屋冥加永（ひかへ）」

明治三年、埼玉県立文書館寄託、新井家文書 No. 737

乍恐以書付奉願上候、

御支配所武州秩父郡吉田村名主重一郎、村役人小前惣代百姓代宗作奉申上候、当村之義高八拾三石五斗五升、家数五拾貳軒有之、到而邊鄙農（か）

新井重一郎

間渡世無之、村方二而先年々神流川縁字梁場与申所薬水湧出候場温泉二以なし右場所々雨除圍ひ候、立六間、横四間小屋式軒補裡有之、薬水温泉之義者、諸病平癒与て申伝ひ二而、所々病者立入人訪、（中略）其頃為冥加永式百文宛御上納仕候处、寛政年中神流川満水之節流出致、仍情冥加永御免除相願、弥補裡候ことの無之免處相過罷在、○弘化四未年先規ニ治シ、右場所江名主重一郎、組人恒次郎相償之上、領主役場江願濟之上、温泉小家式軒取立候处、病者人訪追々弥増、村内百姓混居之との替／＼罷出、右渡世當取続務村内助力ニも相成候間、先年ニ基附冥加永五百文宛当春々年々御上納仕度奉致候、何卒格別之以 御慈悲前段願之通皆（か）濟被成下致様奉願上候、以上、

御支配所

武州秩父郡太田部村

願人

名主 重一郎

明治三年

六月

村役人小前惣代

百姓代 宗作

岩鼻県

御役所

(後略)

史料二は、明治三年六月に名主の重一郎と村役人小前惣代百姓代の宗作が、岩鼻県へ梁場の湯の冥加について願い出をした際の控えである。本史料からは、梁場の湯の開湯起源と温泉の経営がわかる。

梁場の湯は、神流川の縁の梁場という場所から湧出した「薬水」を源泉として開湯した。その場所に雨よけの囲いを作り、湯小屋を二軒建てた。温泉は諸病を癒すとされ、噂を聞いた病人が年々太田部村を訪れるようになった。太田部村は辺鄙な場所にあり、人々の生活は農業により営まれ、農閑期に生計を立てることが難しい地域であった。そのような村にとって、温泉の開湯は農業以外で生計を立てる、貴重な手段となった。

入湯客が訪れるようになった頃に冥加が課せられ、一年に二〇〇文を上納することになった。しかし寛政年間に神流川が出水したことで、温泉施設が被害を受けると、冥加の上納が免除となった。弘化四年に重一郎と組人の恒次郎が湯小屋を再建すると、入浴客が戻り、それら人びとのなかには村内の百姓に混ざって居住する者も現れた。太田部村は、温泉の存在が村の経営を支えているため、冥加を毎年五〇〇文納めるため営業権を認めるよう岩鼻県に訴えている。続く史料三も温泉の冥加に関する内容である。

【史料三】「温泉切換願」、明治八年、埼玉県立文書館寄託、新井家文書

No. 734

乍恐以書付奉願上候

南第拾壹大区四小区

秩父郡太田部村

第八番屋敷

稼人

米澤栄吉

亥方卯迄五ヶ年季

一、温泉

此冥加金壹円也、

右者、去明治三^午年中、旧岩鼻県御廳江奉願出、午方戌迄五ヶ年季稼方被 仰付、是迄相稼罷在候、然処当明治八年季明二付、高又当亥年より来卯年迄五ヶ年季切替奉願上、是迄通り稼度候、（中略）

明治八年五月

右稼人

米澤栄吉

役人物代

新井藤八

戸長

新井重一郎

楫取熊谷県権令殿

史料三は史料二同様、冥加に関する願書である。明治八年（一八七五）に冥加を上納する期限が切れることから、引き続き冥加を納めたい旨を願ひ出ている。史料二と比べると稼人の米澤栄吉の名が見られ、米澤が実質的な温泉管理をしており、明治六年までに見えた村による経営という形が変化したようにも考えられる。また、寛政期では二〇〇文であった冥加が年を追うごとに、五〇〇文、一円というように年々金額が増えている。この背景には浴客の増加、それにもなう経営が安定したことがあるといえる。

同じ明治期でももう少し時代を下つてみる。史料四は所変わって吉見の温泉の史料である。

【史料四】「吉見鉱泉略記」、明治三十二年、埼玉県立文書館寄贈、

古沢家文書 No. 13694-2

武蔵国吉見郡南吉見村ニ湧出する鉱泉ノ濫觴ヲ探ルニ太古ヨリ温泉ノ
アリタルヲハ新編武蔵風土記稿抽澤村ノ條下ニ(古ヘ温泉アリシニヨリ
湯澤ト唱ヘシヲ抽澤ニ改ム)(現今ノ吉見村ナリ)トアリ、抑モ本泉ノ
性質タル曾テ泰西学士「ドクトルヘルツ」氏ノ原著大日本温泉考中ニ
記載スル第四種含塩泉中ノ硫酸鉱泉同種ノ鉱泉ナリ、明治二十年三月、
正七位河田龍氏ノ発見ニ係リタルヨリ以来試浴場ヲ建設シ、遠近ノ患者
ヲシテ入浴セシムルニ、百病癒サルナク、依リテ全年十月吉見鉱泉株式
会社(日新館)ヲ組織シ、若干ノ資金ヲ合本シテ浴室客舎ヲ建築シ普ク
浴客ノ便利ニ供シタリト雖、開業日尚日浅ヲ以百事隔靴ノ虞ナキ能ハズ、
幸ニ浴客諸彦ノ注意ニ依リ、非常ノ改良ヲ加ヘ、大ニ其面目ヲ整頓セリ、
東京衛生試験所ノ分析ニ依レハ、硫酸、亜爾加里、格魯兒、石灰、珪酸、
苦土、鉄及礬土、磷酸等ノ成分ヲ含有ス、
医治効能ノ百病中其著シキモノヲ挙げハ、脚氣、癩麻斯、胃弱、食思欠
乏、慢性腸加答兒、常習便秘、慢性胃潰瘍、肝臓病、脾臓、腫張及腺病、
肥胖病、慢性気管支加答兒、肋膜滲出物、腐骨疽、灼傷病及水腫病、慢
性滲出物、水脈腺腫、慢性子宮炎、乾癬、汗ノ分泌過多、黄班、鱗癬病
及腺病等也ナリ、(後略)

明治二十二年三月

吉見鉱泉会社

史料四は明治三二(一八八九)年に吉見鉱泉会社が発行した「吉見鉱

泉略記」で、吉見村(現吉見町)に新しく開設した吉見鉱泉株式会社(日
新館)の広報である。吉見鉱泉は明治二〇年(一八八七)に河田龍によ
つて発見された。『新編武蔵風土記稿』には古くに温泉があったことが
記され、温泉が湧出する地域であることが知られている場所であつた
(13)。

泉質は硫酸泉質で、東京衛生試験所に分析を依頼している。脚氣やリ
ウマチ、胃弱など百病に効くという。温泉ができたあたりは施設が不十
分であつたため、株で資金を集め、宿泊や貸座敷ができるほど充実した
施設となつた。後略部になるが、東京へ十三里、埼玉県庁へ九里、川越
へ四里といった主要都市からのアクセスについても記されている。

民間の会社による経営色が色濃く見える内容で、東京衛生試験所によ
る泉質のお墨付きや百病を治すという謳い文句、施設の充実さとアクセ
スの明記により浴客を呼び寄せようとしている。こうした温泉経営の様
子は先で見た梁場の湯とは異なる様相がうかがえる。梁場の湯は、支配
者層に冥加を納めることで営業の権利を認められること、人びとの評判
が広がることは、近世以来の経営のありかたが見受けられる。同時期に
存在した二つの温泉がこのように違う様相を見せるのは、経営主体が村
にあるか、民間にあるかの違いもあるう。

二、近世埼玉の人々の温泉旅行

前章まで温泉の経営についてみてきた。ここからは温泉を利用する人
に視点を移し、史料を紹介する。

湯治とは、温泉に入ることと心身を養う療養方法の一種である。湯治
は七日間を一回りとし、最大計三回りの二日間温泉地に滞在し、日に

一から三度の入浴を繰り返す。また湯治には一夜湯治といわれる一泊のみの湯治もあった。ここでは同じ時期に温泉を目的として旅行した二つの事例を紹介する。

一つは中奈良村の野中氏が二ツ嶽(現群馬県伊香保町)の温泉地を訪れた事例である。野中氏は武州幡羅郡中奈良村(現熊谷市)を開発し、近世において同村の名主や代官、熊谷宿の助郷惣代を勤めた⁽¹⁴⁾。

本事例は埼玉県立文書館寄託の野中家文書内、「入湯日記帳」⁽¹⁵⁾からわかる。「入湯日記」は嘉永三年(一八五〇)七月一日から同年八月六日までの記録が記された横半帳の史料である。いわゆる「日記」として想像されるような、日付や天気、一日の詳細な出来事を記すものではなく、何日に、どこで、なんのために、誰に、いくらの金銭を支払ったかという、支出書付である。表紙には、「嘉永三戌年 七月十八日出立」、「入湯日記」、「中奈良野中氏」とあり、作成者は判然としない。つづいて内容をみていく。

七月一日に中奈良村を出発。その際笠一つ、草鞋一足、梨を一つ、薄荷飴を買い求めている。中山道を群馬方面に北上し、本庄では茶漬を食べ、休憩し、岩鼻を渡河、新町で休憩を取り、荷物を預け、高崎宿の栄屋という宿屋に宿泊した。翌十九日は柏木で休憩をとり、天神峠を越え、二ツ嶽に到着したのは七月二三日である。二ツ嶽では湯銭として四拾八文を二三日と二五日にそれぞれ支払っている。この温泉は蒸湯として知られ、らい病や胃酸(胃酸の逆流)、疝気などに効能があると言われる⁽¹⁶⁾。この二ツ嶽には七月二三日から七月二九日までのおよそ七日間滞在し、八月一日には天神峠におり、おそらく伊香保方面に移動したのではないかと推測する。八月五日には伊香保を出発しており、

その夜は倉賀野で一泊している。八月六日には倉賀野から妻沼まで船で移動したとみられ、記録は終わっている。この旅は一回りの湯治を行ったもので、往復で通るルートが異なっている。また道中では手拭などの土産を買い求めており、湯治を行うだけでなく、伊香保などの名所にも立ち寄る、娯楽的側面があったこともいえよう。

もう一つの事例は諸井泉衛が川中温泉を訪れた記録である。諸井泉衛は本庄(現本庄市)に居を構えた東諸井家の十代目の当主で、先代の当主仙右衛門の家業を継いで、本庄近在の絹、太織を買い取り、京都や桐生で染絹したものを関東一円で販売し、糸繭や蚕種の販売も行い生計を立てていた。明治に入ると本庄郵便取扱所を開設する。泉衛はまた漢詩や和歌の制作をし、水竹水竹書屋、水石山房などの号を使用した⁽¹⁷⁾。泉衛は嘉永三年と嘉永六年(一八五三)に川中温泉を訪れている。ここでは先に見た野中氏の事例が嘉永三年であったことから、嘉永三年の記録「温泉日新録」をみていく。「温泉日新録」は嘉永三年八月二八日から同年九月八日までの日記で、堅帳の史料である。川中温泉は硫黄泉で、リウマチや湿疹、皮膚病、カタルなどに効能があるとされる⁽¹⁸⁾。「温泉日新録」の内容をみていく。

【史料五】「温泉日新録」、嘉永三年、埼玉県立文書館寄託、諸井(三)家文書No. 5336。

時嘉永三年庚戌参秋念八日、晴天晴、茅亭発足、跨馬行、到新駅、蔵六亭憩、岩鼻崎船過、倉賀野宿到、高崎宿前澤至、緑長〇家尋、油屋憩、買馬柏木至憩、水澤丸一亭投宿、同念九日、晴天発足、岡崎新田茶亭憩、五丁田小松亭憩、又買馬原町到、

茶亭憩、又買馬郷原村過、矢倉、岩下、松尾過、漸川中温泉到、建酉月昨日、天曉天、參伊勢忠主、○杯輩夜来、湯中投宿、

同二日、前宵雨曇り、午時晴、湯守来、煎茶話、隣家寓屋境漸く残、増利七之妻来話、此夜得一一吟句

川中温泉秋夜即事

窓下夢醒、歌枕柱風吹雨響○頭起来、開屋山月潤水磷と鼓作流、
(後略)

史料五は「温泉日新録」の冒頭部分で、川中温泉(現群馬県東吾妻市)までの道中が記されている。泉衛は八月二八日に本庄の自宅を出発し、岩鼻崎を渡船し、倉賀野、高崎、柏木を経て、水沢で一泊する。翌二九日に岡崎新田、五丁田、原町、郷原村、矢倉、岩下、松尾を経て、川中温泉に到着する。移動手段は、徒歩、馬、船である。川中温泉にいつごろまで滞在していたかは不明である。湯治場での過ごし方は入浴をしつつ、知人と交流している様子が見える。また漢詩も作成しており、川中温泉の秋夜について、夜半の月が輝き、川の水が鼓の音に聞こえるといった地域の豊かな自然を詠んでいる。また、近所を散策し、道中の道草をスケッチするなどして過ごしていたようだ。入浴しているようだが記録はわずかで、知人との旧交を温めている。

嘉永六年の記録である「川中温泉日新」は八月一四日から同月二二日までの記録で、「温泉日新録」と類似のルートで川中温泉まで行き、いつまで滞在したかも不明である。登山や知人との交流、近所を散策し、山菜や雑草の採取をしていたようである。嘉永三年、六年の記録からは、泉衛の湯治は療養的な湯治というよりは、人々との交流や趣味を行うな

ど、娯楽としての側面が強いものであるといえよう。

以上二つの事例を見てきた。同時期に同じ方面の温泉に向かう旅であっても、目的が異なり、偏に温泉旅行といっても性格が変化することが分かる。熊谷と本庄という地域の旅先地域は、中山道が整備されており、かつあまり遠方ではないという点から、群馬方面が選ばれたのではないかと推測する。

三、おわりに

以上、埼玉の温泉について、埼玉にある温泉地と、埼玉の人々の温泉旅行という二つの視点から史料を紹介した。前者については秩父郡太田部村の梁場温泉を中心に、秩父七湯の一端を見た。周囲を山林が囲む秩父地域において、田畑や木炭、養蚕業、織物業などの限られた資源で生活をつないでいることが知られているが、その資源の一つに温泉も含まれることが今回わかった。病気に悩む人々が梁場温泉を訪れ、村人は浴客のために施設を整備し、温泉の権利を得るために冥加を納め、神流川の氾濫という災害に遭いながらも温泉の経営を続けようとしている人々の姿が史料をから浮かびあがった。また被災した際には冥加が免除されており、今後他の史料をあわせて分析すると、支配者の「御救」の一端が伺えるかもしれない。明治に入り、支配者が変わるたびに温泉経営を続けるために冥加を納めるという願いを出している。そこからは温泉から得られる利益が少なくないことがいえる。

吉見鉾泉の事例については、言及が広告からのみになってしまったが、泉質の保証や施設整備、主要都市からのアクセスを明記し、集客

を狙っていたことが分かった。

これら二つの温泉は異なる経営をしており、梁場の湯が冥加を納めることでの営業、吉見鉱泉は株による資金集めによつて施設を整え、経営をするという現代の民間企業に近い経営をしている。経営を始めた時期の違いもあるだろうが、母体が村か民間かによる違いが大きい。今回の分析は限られた史料で行っているため、両者の温泉地ともさらに史料調査をすすめたい。

後者については、今回取り上げた史料においては、近世埼玉の人々が目指す温泉地は群馬の伊香保方面であることがわかった。こちらについては諸井泉衛が現在の本庄市域、中奈良村野中氏が現在の熊谷市域に居住していたため、あまり遠方ではない群馬方面に向かったと推測する。

明治初期の事例を挙げるが、比企郡番匠村（現ときがわ町）の医師小室元貞は、伊豆、熱海方面を旅し、温泉にも立ち寄っている。彼が記した記録からは温泉の縁起や成分に関心を寄せていることが分かる⁽¹⁹⁾。明治に入り、鉄道の敷設や人力車の誕生により交通網が発展し、また閑所が撤廃されたこともあり、人々の旅がより気軽なものになった。このような背景から元貞は伊豆、熱海方面を目指したのかもしれない。

最後に冒頭の課題に立ちかえる。本稿を通し、有名な温泉地が無いというよりは、知られていないという評価がより妥当であろう。近世の埼玉では温泉の経営がたしかにされていたことがわかり、それゆえ温泉の研究は可能であることが判明した。どのような研究展開が望めるかについては、先行研究で行われているような温泉経営という視点で研究ができるだろう。また埼玉の人々がどの温泉に向かったかという視点からの

研究も可能である。埼玉の温泉を訪ねる記録があれば、埼玉の温泉の諸相についてより克明に描けるだろう。いずれにせよ、史料を発掘する必要があるため、今後の課題としたい。

末筆ではありますが、執筆にあたる史料調査において埼玉県立文書館にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

註

- (1) 山本英二「自然環境と産業 近世の温泉」、井上勲編『日本の時代史二九 日本史の環境』、吉川弘文館、二〇〇四年。
- (2) 高橋陽一『近世旅行史の研究 信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』、清文堂出版、二〇一六年。荒武賢一朗「近世の温泉経営と村落社会」、荒武賢一朗・野本禎司・藤方博之編『みちのく歴史講座 古文書が語る東北の江戸時代』、吉川弘文館、二〇一〇年。
- (3) 門屋光昭「南部領の温泉と湯治について」、『岩手史学研究』六五、一九八一年。浪川健治「支配と統合の論理と象徴―南部利視の「御忍湯治」をめぐって―」、『自然・人間・文化―地域統合と民俗統合―』、二〇〇一年。
- (4) 鈴木則子「幕末沼津藩における湯治の諸相―『水野伊織日記』の分析から―」、日本温泉文化研究会編『湯治の文化誌 論集【温泉学Ⅱ】』、岩田書院、二〇一〇年。
- (5) 内田彩「温泉情報の柳津からみる江戸時代後期の「湯治」の変容に関する研究」、『観光研究』二三巻一号、二〇一一年。
- (6) 原淳一郎『江戸の寺社めぐり 鎌倉・江ノ島・お伊勢さん』、吉川弘文館、二〇一一年。深井甚造『江戸の旅人たち』、吉川弘文館、一九九七。
- (7) 高柳友彦『温泉旅行の近現代』、吉川弘文館、二〇一三年。

- (8) 環境省ウェブサイト「令和 4 年度温泉利用状況」
URL: https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/4-5_p.1.pdf (1015 年一月八日最終閲覧)
- (9) 「秩父七湯」、『日本歴史地名体系 第11巻 埼玉県の地名』、六三二頁、平凡社、一九九三年。
- (10) 観光庁ウェブサイト「秩父温泉郷 秩父温泉の概要・歴史」、URL: <https://www.mlit.go.jp/tagengo-db/R1-01221.html> (1015 年一月八日最終閲覧)。なお『日本歴史地名体系』「秩父七湯」の項(注9)では、大指温泉が消滅した理由を湧出量減少と記している。
- (11) 埼玉県編『武蔵国郡村誌 第七巻』、埼玉県立図書館、一九五四年。
- (12) 蘆田伊八編『大日本地誌体系⑧ 新編武蔵風土記稿 第十二巻』、雄山閣、一九八一年。
- (13) 蘆田伊八編『大日本地誌体系⑩ 新編武蔵風土記稿 第十巻』、雄山閣、一九八一年。
- (14) 埼玉県立浦和図書館編『野中家・新井家文書目録』、埼玉県立浦和図書館、一九七二年。
- (15) 中奈良野中氏「入湯日記帳」、嘉永三年、埼玉県立文書館寄託、野中家文書 No. 2343。
- (16) 中島尚友「群馬県管内鉱泉一覽表」、明治一八年、埼玉県立文書館寄託、諸井(興)家文書 No. 173。
- (17) 埼玉県立文書館編『埼玉県立文書館収蔵目録第 53 集 諸井(三)家文書目録』、埼玉県立文書館、二〇一四年。
- (18) 同注 16。
- (19) 埼玉県教育委員会編『埼玉県史料叢書 24 小室家文書三 五代小室元長日記』、埼玉県、二〇二二年。

参考文献

- ・井上勲編『日本の時代史二九 日本史の環境』、吉川弘文館、二〇〇四年。
- ・高橋陽一『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』、清文堂出版、二〇一六年。

- ・田代脩・塩野博・重田正夫・森武『埼玉県の歴史』、山川出版、二〇一五年(一九九年初版)。
- ・日本温泉文化研究会編『湯治の文化誌 論集【温泉学Ⅱ】』、岩田書院、二〇一〇年。
- ・水野由紀子編『日本史のなかの埼玉県』、山川出版社、二〇二三年。